

平成 21 年度 普及に移す農業技術 (第 1 回)

[分類] 普及技術

[成果名] リンゴ斑点落葉病防除にナリアWDGが有効である

[要約] リンゴ斑点落葉病防除にナリアWDGの2,000倍液を散布する。本剤の一成分ピラクロストロピンはストロビルリン系薬剤である。連用は避け異なる系統の薬剤と輪番で使用する。

[担当] 果樹試験場 環境部

[部会] 病虫部会

1 背景・ねらい

ナリアWDGは平成 18 年にリンゴ輪紋病および褐斑病に、平成 20 年に炭疽病に対して普及に移した。今回、斑点落葉病に対する防除効果および薬害の発生の有無を検討し、有効な防除薬剤と考えられたため、普及技術とした。

2 成果の内容・特徴

(1) リンゴ斑点落葉病防除にナリアWDGの2,000倍液を散布する。

農薬登録内容

ナリアWDG

[一般名及び成分含量] ピラクロストロピン 6.8%、ボスカリド 13.6%

[毒性] 人畜毒性：普通物相当 [魚毒性] C類

[対象作物に対する適用登録状況 (平成 21 年 9 月 25 日 JPP ネット確認)]

作物名	適用病害虫	希釈倍数	10a当たり散布液量	使用時期	本剤の総使用回数	ピラロストロピンを含む農薬の総使用回数	ボスカリドを含む農薬の総使用回数
りんご	うどんこ病 褐斑病 黒星病 黒点病 すす点病 すす斑病 炭疽病 斑点落葉病 輪紋病	2,000倍	200～700L	収穫前日まで	3回以内	3回以内	3回以内

本試験は純粋に殺菌剤の効果を判定する目的のため、また、適用登録内容が決定される以前に実施したため、散布回数は適用登録の回数を超えた。

3 利用上の留意点

(1) 本剤の一成分ピラクロストロピンはストロビルリン系薬剤である。ストロビルリン系薬剤は薬剤耐性菌の出現が懸念されることから、連用は避け異なる系統の薬剤と輪番で使用する。

(2) ぶどう「ピオーネ」には葉および果実に、「コンコード」、「藤稔」、「シャルドネ」等には葉に薬害を生じるおそれがあるのでかからないようにする。

(3) なしでは、開花始めから落花 20 日頃までの散布は葉に薬害を生じるおそれがある。

(4) 西洋なし「ル・レクチェ」には果実に薬害が生じるおそれがある。

(5) 魚毒性が強いので、河川、湖沼、養魚池等に飛散流入しないようにする。

4 対象範囲

県下全域

5 具体的データ

(1) ナリアWDGのリンゴ斑点落葉病に対する効果を平成 15 年、21 年に検討した (表 1、2)。

ア 平成 15 年は多発生条件下の試験となった。ナリアWDGの2,000倍液は対照のフジオキシラン水和剤に優る高い防除効果が認められた。葉における葉害の発生は認められなかった(表1)。

表1 リンゴ斑点落葉病に対するナリアWDGの防除効果(平成15年、果樹試験場)

供試薬剤	希釈倍数	調査葉数	発病葉率 (%)	病斑数 / 100葉	防除価 ¹⁾	葉害 (葉)
ナリアWDG	2,000	202.5	1.2	1.2	98	なし
フジオキシラン水和剤	500	192.5	6.8	8.9	86	なし
無 散 布	-	217.0	50.1	111.9		

1)発病葉率より算出。防除価 = 100 - (散布区の発病葉率 / 無散布区の発病葉率) × 100

試験場所: 果樹試験場内ほ場

供試品種: 「スターキング・デリシャス」(約25年生、強せん定樹)

試験規模: 1区2~3樹、2反復

薬剤散布: 平成15年6月3日、6月16日、7月1日、7月18日の計4回、動力噴霧器で十分量を散布した。

調 査: 試験開始時に最上位の展開葉にマーキングして、以降に展葉した葉を調査対象とした。平成15年7月24日に1区当たり8~10新梢の展開葉全葉について、発病の有無および病斑数を調査した。葉害の発生の有無については御時調査した。

イ 平成 21 年は中発生条件下の試験となった。ナリアWDGの2,000倍液は、対照のキノンドー水和剤80に優る防除効果が認められた。葉における葉害の発生は認められなかった(表2)。

表2 リンゴ斑点落葉病に対するナリアWDGの防除効果(平成21年、果樹試験場)

供試薬剤	希釈倍数	調査葉数	発病葉率 (%)	病斑数 / 100葉	防除価 ¹⁾	葉害 (葉)
ナリアWDG	2,000	1,026.0	3.6	4.5	80	なし
キノンドー水和剤80	1,200	1,151.5	7.9	10.0	57	なし
無 散 布	-	596.5	18.4	22.6		

1)発病葉率より算出。防除価 = 100 - (散布区の発病葉率 / 無散布区の発病葉率) × 100

試験場所: 果樹試験場内ほ場

供試品種: 「スターキング・デリシャス」(約31年生、強せん定樹)

試験規模: 1区2~3樹、2反復

薬剤散布: 平成21年6月4日、6月19日、7月3日、7月25日、8月11日の計5回、動力噴霧器で十分量を散布した。

調 査: 試験開始時に最上位の展開葉にマーキングして、以降に展開した葉を調査対象とした。平成21年8月25日に1区当たり10~20新梢の展開葉全葉について、発病の有無および病斑数を調査した。葉害の発生の有無については御時調査した。

6 特記事項

[公 開] 制限なし。

[課題名、研究期間、予算区分]

果樹の新規農薬等の効果試験、平成15、21年度(2003、2009年度)、民間受託